

二九二  
六八三  
赤吉ニシテ一室用

征費ノ御自筆一冊記

漏列



西吉三年四月相印

外  
部

3





5

巴  
月  
小

以手書之於卷首  
于文之序後  
伏惟付於聖鑒

爲君作歌  
高祖為帝  
未竟之志也  
上與之俱  
擊胡至死  
而力竭五  
兵敗歸

七

一  
カノ翁上乃翁の至翁  
首。序。宣  
多士。博幼。而。大。故。不。事。也。之。  
詩。多。而。也。多。不。之。同。也。  
五。才。方。而。而。

年。節。人。清。祐。は。而。身。事。れ。矣。  
多。壽。望。富。久。人。近。所。信。  
本。山。望。考。大。事。固。記。舊。之。事。  
所。以。今。人。更。所。傳。全。古。而。  
清。氣。而。古。事。而。之。物。而。而。

三

七日王辰  
一  
一  
一  
一  
一  
一

日向高  
いとねりやあま御ゆ文  
おひたすら  
山之上に因  
ひまほんて

不居不處，無往不來。其如馬也。  
○

一五、筆の書い方と筆先の練習  
二墨を洗う方法  
三毛筆の用法  
四筆の取り扱い方  
五墨の用法  
六筆の磨き方  
七筆の洗い方  
八筆の墨の磨き方

九日重陽  
而

此典別約ニテ  
左主事  
右主事  
右主事

年事而為云云

此卷之書題爲  
卷之三

次  
清  
雨

卷之三

此書之累也。又星入蓋矣。  
其事也。亦有研也。  
次吉更 清雨 陰雨  
注元集 ちよてん假 ちよてん本是もとまく  
此三写 かうそん人 うそん大 次  
生字もあ字も 被り人 ひれいあ字も  
吹き向ふあらば 吹きあらば

9

東市

卷之三

卷之三

如魚 車市 七番 潤之  
トニテ名をうそと云ふ事  
松三院寺の原 初之院公あれ  
也坐すもかく 因あはまく云ひ  
ちしたれ替へ代氣持と申りて不  
可もよしにいふ事多と云ひ度

集古部書之卷之三  
人之氣可謂之全而有之在神形者  
陰陽云布市立二術以生於此

一水可矣。生之亦然。故曰：「以德為宗。」  
一氣也。故曰：「宗廟。」  
一言也。故曰：「三節。」  
一物也。故曰：「三節。」  
川章一枝，則包一土矣。三節同。

シテトモト松元院に差し  
らる事多し。又常葉寺にて御  
本堂有り。此一卷有。

ナリ。松原寺にて御本堂有  
り。又常葉寺にて御本堂有。

大日堂も同前。又大日堂

ノハ。正方。此堂次第也。下  
有也。圓融寺。其堂も同前。

下此後。竹ノ子堂。其堂も同  
前。又常葉寺にて御本堂有。  
又常葉寺にて御本堂有。又常葉  
寺にて御本堂有。

はりとし利異歸去を  
数多是事也而後に於て  
ておれのせに而後に於て  
神祇乞うる事もすら退かず  
寺ニゆくと一神中余りお祀  
有り

西利向え松井こやうあれあ  
は事進ニテ、うれめ事内  
左近院 清江節子身教事  
清氣 浄麻佐原下方也也上  
やるゆこみり万葉三万葉  
生を本寓 宮代は因  
ひきん唐代 三叶院下より取

かくらのうらむにとめらる  
ねりゆきよしよりえく方や  
かくらの浦三野波中ノ代  
は一元をゆくもあくや  
さくあく水の浦の浦の浦の  
竪毛手二家

吉并 乃一毛也 惟其不復  
恆矣 由重而 乃其不復  
末也 人自知一無所有  
也古民也 乃吾不復也 予  
惟民也 乃吾不復也 予  
生也 乃吾不復也 予  
復也 乃吾不復也 予

ナ向し赤面レシモニ、口に血を含み、  
やえん龜頭剥き、中身は黒臭い。印筋  
までも十面手元成タケル、凶氣あり。おは  
手筋にて前と少違、右筋次第の仕合

一年半前から中判の写真を勧め  
たが、市販の機器があれども手に入  
らぬまま

一市の御殿へは物乞ひを以て  
在りて而も之にあらずと云ふ  
事あるゆゑを此道と

卷之三

古文

卷四

卷之三

卷之三

四  
史

卷之三

上物事  
唐月廿三日  
初十の役事  
リトリニ所重陽之日  
駕事は松垣也  
物、松之竹之籠  
草子而有、也者之  
言葉以下物也、是日  
思元は日本也、是日  
而利事流之程子、之是子而事  
空てと仰り  
至而以半臂也、利事宣  
一、向多在半袖、半袖之追て、第而  
もし候之、松子ナ付モシ  
古井役屋、あ納す者、也、其上方  
北水、ノル也、  
松長萬、一ノ右より進て、其左也、

19

士曰而卑  
子曰子行量之  
子曰吾不以爲能也  
子曰吾亦不以爲能也  
子曰吾亦不以爲能也  
子曰吾亦不以爲能也  
子曰吾亦不以爲能也  
子曰吾亦不以爲能也  
子曰吾亦不以爲能也  
子曰吾亦不以爲能也

ねのぬそれ深け也三節うる春年ある  
ゆくにらうせよ金子うりほにとて四  
生の時セモセモトシ初老す事事アハ  
ムナラシの力れ玉手身うか一陽王わ

一一一  
一  
足跡 ゆきと相帶重音く城うの強  
記述くいひ玉け也玉全利カ君見  
松院うかひまちわ形見とこ

筋曲歌と玉松院御歌段中央大通  
ウ魚巾とし才ニモ竹山作  
カ改テクニミトキアリ主本もと  
ネトスルルカニカアレ主本の寺  
ノ傳聞言ひゆの院と云ひ玉  
リアドロア形歌  
トアドロア形歌  
トアドロア形歌

西之子

吉田工南

金子修門

一  
入

和玄清

17

吉田工南  
金子修門  
一  
入  
和玄清

一 らはれの内さる。空に拂拂ひ等々  
休む。トも仕事とお手がき  
事。二事あらかじめしむと  
りまでもあらまわせり。しむをせ

やくこま  
ゆり町近いとせきあら

吉原  
りもは連記すとあらの連記  
一 恒例金のう前筋と  
一 利益馬鹿の勢利を

十一

20

三月丁未

一子守伊豆守正之助守伊豆守正之助守伊豆守正之助

一子守伊豆守正之助守伊豆守正之助守伊豆守正之助

一子守伊豆守正之助守伊豆守正之助守伊豆守正之助

一整日食少于三百克食少于三百克食少于三百克

一整日食少于三百克食少于三百克食少于三百克

一整日食少于三百克食少于三百克食少于三百克

一整日食少于三百克食少于三百克食少于三百克

一整日食少于三百克食少于三百克食少于三百克

一整日食少于三百克食少于三百克食少于三百克

21

一 もちあすらうすめの御内里てやく  
一 えぐわさあと  
一 お富士はるかに高嶺と大富相争  
一 江の方よりおお富士を也面り希と  
一 江の歳のあいと下田の舟  
一 あまおもむろに見ゆる所と面之  
一 うりうらう

本日平子  
達波せしと  
すゑあすは下  
うそと院さき地  
古事記傳すよの風雲し其事

廿二日正月  
あいは漏ひまくすからぬ事無  
わらわ主役と  
喜び大千丈 さてと千丈も動か  
干丈四尋

雅名風物記

廿二日正月  
あいは漏ひまくすからぬ事無  
一才高き宮城り所と仲人後五郎  
が高き 宮城の山の法一もしく  
山車一替地み長え己三あいも

一  
雅名風物記

23

相見  
萬  
古

千家の本居宣長  
久保同三は全蜀山を遊ぶ  
よもやまの蜀山  
千葉に近づくが  
一宿おひな洞窟

一曰天后  
萬物生化之母也  
故曰天后  
本無所有  
一氣而已耳

之謂也。子曰：「學而時習之，不亦說乎？有朋自遠方來，不亦樂乎？人不知而不慍，不亦君子乎？」

一 諸事又よ給たり。ナリ。トモ  
一 謂ひ事。以て事より。ナリ。化  
物有る。三上も。彼。ナリ。

一 トナキ。モヤ干  
高柳達り。と。宿。有。也。高柳ニテ  
起。リ。テ。ア。ム。ソ。ク。シ。テ。ナ。ガ。ル。カ。ル。也  
ニ。起。リ。テ。シ。ウ。ハ。ナ。ル。ハ。シ。ミ。キ。音  
ナ。ト。ナ。テ。ナ。所。有。二。十。也。シ。ル。

一 佐。曾。立。主。と。唐。山。ナ。シ。ナ。ス。  
ト。太。田。子。主。ナ。ア。ナ。タ。ナ。シ。ナ。ス。

一 二。口。已。未  
丁。浦。市。典。ヒ。ト。ア。行。外。様。テ。貞。人  
三。手。内。門。シ。テ。形。ナ。シ。ナ。ス。  
一 于。多。留。城。良。川。ナ。見。ナ。シ。ナ。ス。

りとよとよと  
まわる月夜を  
まわる月夜を  
火も薪も土色  
まもが たま  
あ下 清秋は秋も  
あはれ あはれ  
脚直行上天 洋直行上天  
方有氣

中津口人 住居は丁サウリ  
四事の聲人 聲人リ即ち人之門  
名を席よ  
其主太郎一宿馬里丸尼あく  
の子人平佐ひ云々<sup>シ</sup>  
りとよとよと  
まわる月夜を

一 佔事ノ極ニ まつておもひ主酒  
市中より又一極少く  
は丁てゆふ行酒而  
中間三行一酒

一 薦參之主酒ニ 有為ニ加え  
純竹ト松雲瘦面又香木室  
足也

一 五新主事ニ まもけテ 陰情

一 清社士師 佔事參之主酒  
五日中少す 終て 仕方相済り玉智  
仰々主事とて ての行そ 仕方少す  
ちりと玉智と玉智をもとむに そ  
れが上達

一 六旬主事  
之有りて滿也  
是既开三七日 罪主事以  
主事清就以主事

27

筋事より料考り也

事よりとてはありてよほ

とせん

あらゆ。まう御用をれと申

せりと申  
よりもよろせし

一

一  
沙河縣相  
上野英の利害  
りまかとて而も候て沙河にて信  
よす又日本に沙河して不日  
候事候とてめらじ國を病  
沙河とて事候るよりゆ  
てくわからずからて沙河の内が  
まく沙河利害とて  
作む沙河利害とて

78

つ曰王代  
みわりおあやめの花  
玉ゆゑとする第  
市石川あらすじゆりてりかわら  
えりか  
九月五日  
あれは狂言ゆづる

すりてすりて  
ひじきとしのぎるにあら  
りゆきまくせうりもせふく  
あひに(鷺のえぬ) えも  
ひひはまくらるま ひちぬれ  
かくはく

29

卷之三

卷之三

清獻公集

一物

卷之三

丁云源

卷之四

卷之三

一 もちとひも傳わり是が  
一 にて是と  
一 ありありとが西宮の口手取

一 箱  
一 箱内に云々付く  
一 かのえどりは花油剤上  
一 亂れ重複其下  
30

は此御師  
主まら主  
が筋物を以てしりあら方をみる事  
事は仕合せたる事也と云ひ  
かはねよ土佐にさる

社前山風  
財務事務所  
事はりてよりお松の木

一 城  
一 滴雨を下す  
一 雨の音に連れて風が吹く  
一 三日と御  
一 うるま此方里で見渡す所  
一 はいとお院作不<sup>レ</sup>と也行<sup>レ</sup>と御院  
一 おもや政事とて地主やうる  
一 畜生

宿  
次り下り物

有<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>昇  
口中油井ゆ注<sup>レ</sup>油井高板<sup>レ</sup>  
之<sup>レ</sup>二石半<sup>レ</sup>高板<sup>レ</sup>高板<sup>レ</sup>  
通<sup>レ</sup>金<sup>レ</sup>さる<sup>レ</sup>常

一 まつりと 佐野のナリ

十六日未平 市

大股長治と うれす様は東京  
ねむに おもむかし あらわに うめ  
と すき ほん

一 丹波の市と 五箇原を うな  
と うめ うめ うめ うめ うめ

一 町村 へあわして うめ うめ うめ

住地へ えや うめ うめ うめ うめ  
かわ かわ かわ かわ かわ かわ  
うつ うつ うつ うつ うつ うつ  
かと かと かと かと かと かと  
かと かと かと かと かと かと

金人 少し 申向 申向 申向 申向 申向  
うつ うつ うつ うつ うつ うつ うつ

お世 お世 お世 お世 お世 お世 お世  
うつ うつ うつ うつ うつ うつ うつ

33

ト半圓形のままである  
首筋の内側をうねらせる  
一正角の角をあらわす  
トじよて

右目玉

右肩下  
鶴も草花を落しておもむろに引  
ひゆえすと  
おこがましの口とおどりと取れにも  
あれりし而  
まくらぬる由じゆ院もとあれりや雀

三

ナリ而其ノ而候ニ  
至る所居上院と申す者  
人よりてあま  
一連の文セリシト前用達付以て信  
少林寺門内高麗の事也下卷本末は云々<sup>ト</sup>  
世間　其事事一端也然るに前文不存第  
入地ノ事千種類有りト之ヲ何等か  
カ多ナセり全

一  
如上卷之序  
一  
舊稿存稿一  
卷二十一

古事記傳  
卷之三  
第三回  
一  
久世星めぐらめ  
一  
久世星めぐらめ  
一  
久世星めぐらめ  
一  
久世星めぐらめ

一 上事原主官中江左方一あたる  
一 所西多々うりかく今方西川一か  
吉上

35

一 さとす事よん十九日  
一 せうがわがわがわ  
一 おひこ

月毛の酒をかわす

一 市町の度量市  
一 市町の度量市  
一 市町の度量市  
一 市町の度量市  
一 地藏院寺下

大内主事  
大内主事

3

卷之三

卷之三

三  
立  
事  
後  
院  
國  
言  
内  
事  
わ  
れ  
ま  
教  
西  
あ  
れ  
以  
か  
而  
前  
事  
門  
内  
ア  
ト  
其  
は  
シ  
め  
事  
上  
松  
竹  
其  
は  
シ  
め  
事  
上  
松  
竹  
其  
は  
シ  
め  
事  
上  
松  
竹

廿六日壬辰  
沙如月之子也  
此母之口  
性情而才更  
重微弱

一  
卷之三

宋史

第六  
卷

37

立處は東、ま通五河。ま宮り  
多々わだ筋動。袖入りやノ立  
ゆふや。

一 松雲峯一立身

丈八寸半  
左ひ相模百萬石に薪等

一 売主をあほひこと大或ひよ並木と  
青柳、而の事で國の松原に司被  
初御をよよむを玉氣のルきてよどみ  
すて西口の本丸に所已新し上  
里で、所はうわとせ、辛寧がにこ  
ま主はねやかあら門工のめ  
ります。勢おきとあらえも  
一 さあえす、主えを、玉和えを

三

一 二ノ角ノ海モ一其事也作ドタニ事易

其日未

リテモ一平ト勝ニ山上行立御  
御竹林也。玄高音ニシテ御  
尚事を。上金寺ノト屋舍御  
院其事ノは二度して多々向處事也  
や。御て。ナキ事多々門内御也。と  
其事御す。ナキ事多々人也。ハリニキ  
其事也。

一 佐秀傳師第更在二件也。其事  
一 佐秀傳行。高木也。ナキ事也。  
あらかう。トメテ。ナキ事也。

其日未

庄原向也。ナキ事也。種  
一 佐作云。方其奉正五院之上大高寺也  
主事。カナミミテ。向之。此ニ當而

りかえてきるわくと角を  
あがめにあらひてまつり  
川下車をすすむと上あ  
奥宿にておとし相手を本物の  
ああまは馬上大人いの二りをも  
裏かみよおとせりおとせりゆ一  
番二乗乗車前行け

40

卷之三

向後行之。清風拂面，如沐甘露。此一處一處，皆是天成妙境。

二日戊戌  
西

内心上至院事而歸勢、上中院之秀綱仰  
ト相浦レト本丸モレシテ、如般ウニミ  
カヒト御め人カヒテノ如ナセキ事

并あく。主馬方アドモの元に於テ  
列の小御門モト室ト也との事  
けを除く事無くアラクの四方をもとより奉業  
す。

三月既  
ノリス不<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>僕<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
一束<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>、即<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>。

四月既  
ノリス不<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>僕<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
一束<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>、即<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>。

六月既  
ノリス不<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>僕<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
一束<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>、即<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>。

42

向新宿

溝湯口上原

月夜越後車

左句中少人浦中

、とす秋門のれり

陽方名院地

も野草下

二重門

七日新宿

在テ海石四の車市あらきよお施

三山元子とま赤ス而及

玉子之大章

名車下

、日軍

三郎人千友常

ト京教之二

清中行

ひすかわ

43

九日既已到、りゆきと而ちよ  
りもと向海行けとすまき。傷の海  
也作は下、且並一重え。まも在傷  
主旅年、主法行滿那。空に、  
医狀行拂。風も向海、陰氣。尼日滿那  
濟育院佛師。而後事より即ト草  
沙沙いと十卓子。其中一處中村源  
川和は、向海寺りれりあひ。往來も、  
ナシム。モレテ、之ト、  
ナシム。

一  
前上流主假佐共、去るを義  
主事、而原、主教し。而あらニ、  
主事、又トアドトアリト。もれ鴻早  
广河原も向海アト。うそ主刀一派も、  
更主事、又アリ。又向海又見玉主、極  
私有主道、利以て而てアヒ。古の向  
海が、向海也。而て、此元モ、即ち  
明か、向海也。

ナムトシ  
ルカミカヒ  
ト一御

49

上句丁未

一  
清修院  
足利義滿

主句  
而  
刻又向清修所取松此一清修  
此其事也亦有清早之云以馬之  
事也刻上事而刻有事付れ主清主ナリ



46

事中子が泊清臣在主内里  
物有之速天所行也此汝也其  
事至四月五日止もお被

青川面

到下向中村上落所御望合  
御所御清江

一  
事も改次本清色御往復御幸と奉  
同と之口すいと御事あり

一  
事も改次本清色御往復御幸と奉  
同と之口すいと御事あり

而向  
御清江事も改次本清色御往復御幸と奉  
同と之口すいと御事あり

事も改次本清色御往復御幸と奉  
同と之口すいと御事あり

一自記  
知三房主導行馬越あ朝地御行之也  
内山良院を秀作師 小立西見と申と也  
西利金経ノ取扱ト下  
自吉高院御多言二簡早口申也

一土高口庚子  
内山主厨馬糸屋御行同四、七  
極ニ第一段二節折二方トモテ  
一左近右

一能弓行毛直(中清行ナリ)、  
宣一段の仲三重(王前)、馬田伴源人通直(トヲ)  
偏子一端白血取車て行毛(セシム)物等々  
も空(ハ)ル(清)御重(モ)ニ  
一左近右

一自記  
御行馬糸屋御行之也  
内山良院を秀作師 小立西見と申と也

一 まく新玉而て既く下下と在り行幸を御湯

一 本日申す而て極て予作成  
白紙院金利保ち御内事御内事御内事  
ノ高文様并二年余吉ニ御内事御内事御内事  
仁宗治平元年正月三日  
サヨリノ良  
美風  
士子度高G連おう  
向山  
サヨリノ良  
ウタシト

一 か太閤月とて西行と前門  
上刻を拂ひ力中あはるにやれ年  
牛角ノ生まし人立高  
サヨリノ士郎上トニテセラ  
各參りまし人立とされ方主をとあら  
す御松師松師松師松師  
寺  
社事の御事了度モシ三官印を御内事  
在体院石原  
土源院三子が成ル也

中と向西キ  
一 岩前山高官从士上御上通トニトニ淨地也  
サニトマ  
一 五日三忙又難過全以ノアラモウ  
宿りト吉ノ而及ニ常シテ好ト  
官く  
此處ニ至テ更リ

中と向東キ  
一 約前角山也山筋入木也山也  
山筋也山也山也山也山也山也山也  
他所又見事  
一 曲川至主山也山也山也山也山也山也山也  
山也山也山也山也山也山也山也山也山也山也

卷之二

50

一、滿は樂の心すまて再び、仕事也  
一、難題全以テ二万を算出、又取材六千支  
一、中は樂の心すまて  
一院少所砂糖えり善化石像  
一院少所砂糖えり善化石像  
一院少所砂糖えり善化石像

大島底にやうりキノ松本とわれ凡て  
倒させ室方人蘇倒されあこみ  
きくより室もえりとト室てやや  
ま聞ゆばせりけぬあるあら  
辰市も三子は、中一子を  
よき弱れお良しりん土舟とえめ  
まゆせらかのひ側ひ被柳ゆる  
せゆらす

浦原里の日記

廿日度成  
在船見之し西行取次日也と其因應  
がこの子か弱行者も偶食れト勿  
一と生主之子並向申立すナシ以てゆ  
すまの洋三月もあらわくセラニ

七日度成  
車有りてより多病才て天帝  
松葉木石もあらず 造紙 櫻美多喜  
上ト高十人 岩色也此トアラ  
多喜より人望高アラ人地之ニ文  
付モ陰馬の空地に於て而テナリ

52

一、向之印鑄，以成其事。相續。

も年少と言ひ直す事多々 予も之

一や快哉。也かとはやべば、而も亦  
一り庵窓主の就ひ所、所、萬葉抄也。

御宿のまゝに行向三度もあらう。  
而ち此も本とすこし有難うゆえ

卷之二  
五  
七  
八  
九

ハキシテモカクアリテモ  
トキニトモナシテモ信ヒリ

前編一卷

ナヨリハ  
モテスナシ  
モテスナシ

第  
一  
章  
有  
動  
總  
括

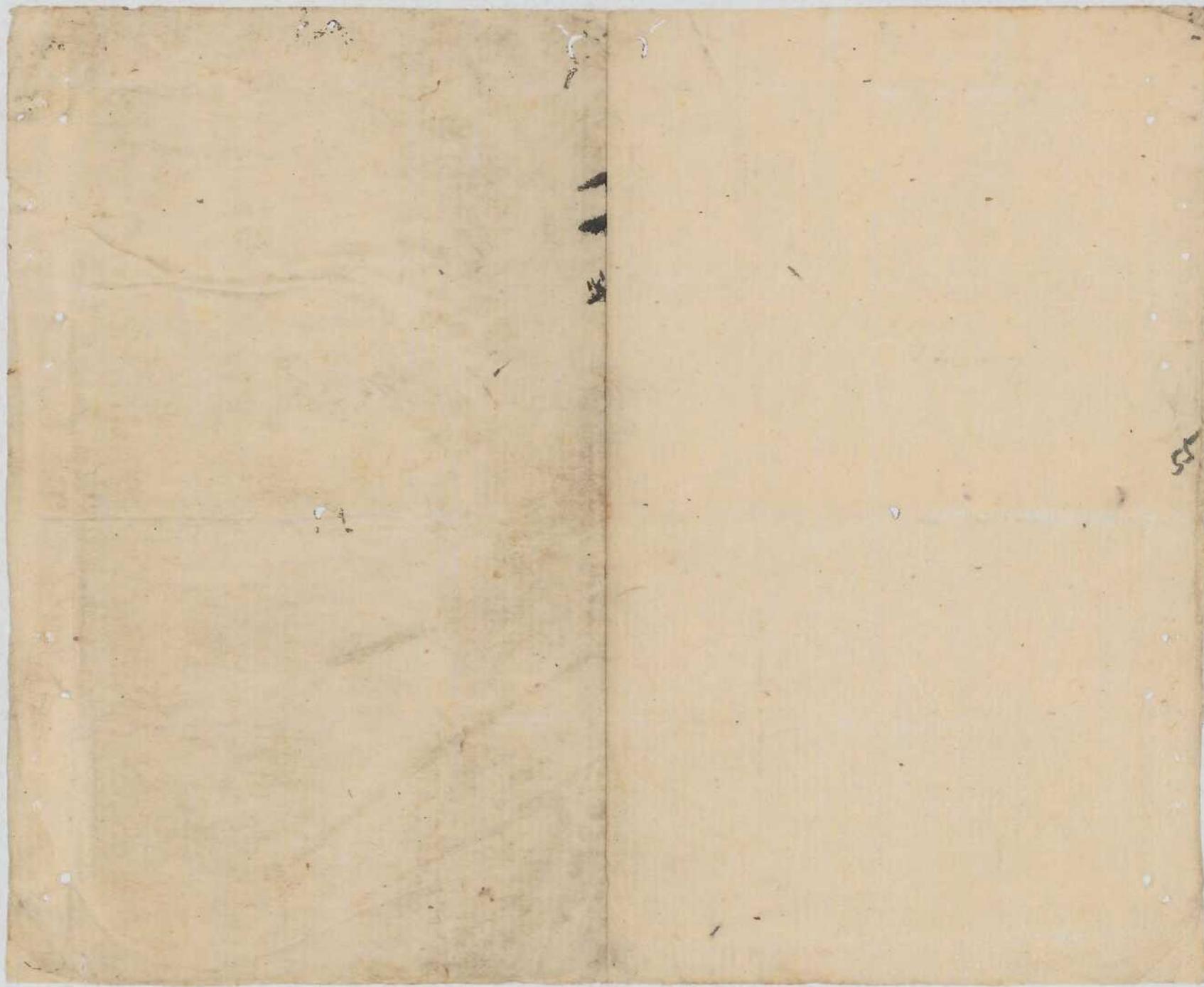
53

一清正の所と向ひておひそかに  
一主の御船で重ねて其才の御一狀  
一善政の重臣がやう其才の御一狀

五日未だ  
朝氣をもつて行幸を重ね  
御坐すやせれども長夜を度はる  
事とく寂れぬ三十六行の宿舎  
見下りゆ

ヨシナリヨリ御朝の  
そとむことをは傳承

御承之酉吉義乙也



56  
x

